

2021年10月21日開催

依存症患者さんへの接し方

成瀬 暢也(埼玉県立精神医療センター)

依存症患者に対して、対応のコツをひとつ上げるとしたら、それは「やめさせようとしないこと」である。この逆説的ともいえる対応に、依存症という病気の本質が見て取れる。

患者は、やめたいと思っている。そして同時にやめたくないと思っている。この両価性を理解していないと、治療者は誤った対応をしてしまう。たとえば、治療者が患者に対してやめさせようとする思いが強いと、患者はその思いと同じくらい、あるいはそれ以上にやめさせられないように抵抗する。つまり、やめない方向に患者を強化することになる。

逆に、やめることを強要しなければ、それだけで良好な関係を維持しやすくなる。治療者や家族からアルコールや薬物の話題を出されるたびに、患者は不快な表情を浮かべて身構える。それをやめるだけで両者間の緊張は軽減されるはずである。「依存症は意志の力ではコントロールできなくなる病気です」と患者に説明しておきながら、やめさせようとするのは矛盾している。患者に、「やめなさい」ということは、自分で何とかする問題だというメッセージである。患者は「突き放された」、「自分で何とかするしかない」と思うであろう。

家族や治療者が、患者に対してアルコールや薬物を力づくでやめさせようとしたり、飲酒や薬物使用を責め立てたりすると、容易に対立が生まれ、両者の関係が崩れていく。つまり、回復のためには信頼関係を築いていくことが不可欠であるのに、信頼関係が損なわれていく。患者はさらに孤独となり、自尊感情は傷つき、追い詰められていく。追い詰められた患者は、否応なく飲酒や薬物使用に向かうことになる。これまで、家庭や医療現場で繰り返し行われてきたのは、このような現象であろう。

患者の回復を強く願う家族ほど、この悪循環のサイクルに陥りやすく、同様にそれは治療者が犯しやすい失敗でもある。それでは、どうしてこのようなことが起きるのであろうか。それは、頭ではわかっているように思えても、実際には、「依存症はコントロール障害を主症状とした病気」という基本的な理解ができていないからである。つまり、患者がその気になれば、アルコールや薬物をやめることができると思っているからである。家族や治療者が、依存症という病気の良い理解ができていないことが最大の問題であると言えよう。

このような状況で世界に目を向けると、フィリピンの薬物乱用者の大量虐殺の報道の一方で、欧州などでは、違法薬物所持の非犯罪化、非刑罰化に移行している国々がある。また、わが国でも米国のドラッグコートを参考にした刑の一部執行猶予制度が施行され、刑罰一辺倒から支援への一歩を踏み出した。そして、現在ハームリダクションの考え方が臨床に導入され始めている。

ハームリダクションとは、薬物の使用量減少や中止を目的とはしておらず、「薬物使用をやめることよりも、ダメージを防ぐことに焦点を当てた公衆衛生的な政策、プログラムとその実践」であ

る。注射器の回し打ちによる HIV 感染症の蔓延という切迫した状況を打開するための苦肉の策であり、注射器の無料配布や注射スペースの提供、代替麻薬の提供などが実施された。当初、「違法」とされることも多く批判にさらされた。しかし、その対策が徐々に効果を認められるようになった。現在は、欧州に限らず、豪州、カナダ、台湾など世界的な広がりを見せている。

わが国はハームリダクション政策に対しては、先進国の中でも消極的な国の代表であるが、ハームリダクションの考えに則った依存症治療や支援は、きわめて人道的であり、患者の主体性を尊重した理にかなったものである。そして、治療効果にも優れていることが報告されている。そして、わが国の依存症治療・支援に最も欠けている大切なことを提示している。ハームリダクションでは、患者が薬物を使っているか否かを問わない。その薬物が違法か否かも問わない。患者の困っていることを支援する。「やめさせる支援」ではなく「生きづらさの支援」である。このような関わりにおいて、患者は人とつながり孤独から解放され人に癒されるようになる。依存症は人との関わりにおいて回復する。

わが国では、依存症患者に対する誤解と偏見、スティグマは深刻であり、それは有名人の依存症に基づく飲酒問題、薬物問題に対する国を挙げての激しいバッシングに見て取れる。法に触れる行為は犯罪であり、当事者は責任を負うべきであるとする考えは理解できる。ただし、一方で、当事者は依存症に罹患している病者であるという視点が全く抜け落ちている。そのため、患者は本来当たり前前に受けられるはずの治療や支援は提供されず、当事者・家族も治療・支援を受けることに躊躇する。それだけではなく、「やめようと思ってもやめられない」状態を、当事者、家族、支援者、治療者は「症状」と捉えずに責めてしまう。そのことが、さらに当事者を追い詰め、苦しみ、飲酒・薬物に向かわせている。

依存症は病気である。懲らしめてよくなる病気はない。むしろ悪化するであろう。わが国では、未だ依存症患者に対する適切な治療・支援は広がっていない。人権を軽視した医療は、正しい医療とは言えない。依存症患者の基本的な人権が尊重されているとは言い難いわが国の現状を考えると、人権を尊重したハームリダクションの考え方こそ、これからの依存症治療の基本とするべきである。

依存症患者は、健康な「ひと」との関わりによって癒され回復していく。回復とは信頼関係を築いていくことに他ならない。